S O T O 禅 インターナショナル

発行日　2004年８月４日
発行人　藤川享胤　　編集責任者　浅井宣亮　　編集委員　大谷　舘盛　太田　菅原
発行所　SOTO禅インターナショナル事務局　〒164-0002 東京都中野区上高田1-27-6
Tel.03-3361-0614　Fax.03-3361-0634　　URL:http://www.soto-zen.net/
郵便振替　00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.26

国際布教師物故者追悼供養　於大本山總持寺

CONTENTS

●巻頭　南アメリカ開教100周年記念行事に臨んで　……南アメリカ国際布教総監　三好晃一　1
●特集１　SZI両大本山ワークショップ報告　アメリカの禅（前編）……SZI会報編集長　浅井宣亮　2
●特集２　南アメリカ国際布教100周年
　ブラジル禅光寺：ユネスコ《ムキリ賞》を受賞　……永明寺　住職　加藤孝正　5
　ペルーにおける曹洞宗　～開教100年の軌跡～　……太田宏人　8
●アメリカの仏教書　「禅の三本柱」　……ヴァレー禅堂　堂頭　藤田一照　12
●寄付者・会費納入者名簿　……15
●第６回　ゆめ観音 in 大船　開催のお知らせ　……16

巻　頭

南アメリカ開教100周年記念行事に臨んで

南アメリカ国際布教総監　　三 好 晃 一

1903年、上野泰庵師は日本からペルーへの第２回移民船で２人の浄土宗僧侶と共に渡航されました。これがペルーにおける日本仏教の始まりとされています。

上野師は現在ペルーで唯一の仏教寺院である慈恩寺の初代住職です。現在慈恩寺住職は７代を数えますが、一人の浄土宗僧侶を除き、曹洞宗僧侶が住職となってきました。

これまで上野師は浄土宗僧侶とされておりましたが、最近の調査により曹洞宗僧侶であることが初めて確認されました。そこで、本年の８月28日にペルー共和国首都リマ市において記念法要が修行される運びとなりました。

現今、南アメリカの日系人社会において日本語は「外国語」となっております。日本語と結びついた日本仏教の存続は難しいかもしれません。その上、北アメリカとも異なり、南アメリカでは英語も「外国語」です。このように言語の問題が布教活動を困難なものにしております。

また、ペルーやブラジルはキリスト教の盛んな国でもあります。日系移民の宗教も、自然とカトリックが中心となってしまいました。

暗い見通しばかりのようですが、ペルーやブラジルといった南アメリカの国は宗教的な国であり、日本よりも宗教の世俗化は進んでおりません。人々の篤い宗教心に応えることができれば、布教は成功すると思われます。特に「禅」は日本語を話せない人々をも惹き付ける魅力を持っております。

大きな希望を持ち、前向きの姿勢で積極的な布教活動を展開していく所存です。そしてSZI会員の皆様が南アメリカの布教活動に関心を持って下さることは、我々現地で国際布教に携わるものにとって大きな励みとなります。

今後ともご支援よろしく御願い致します。

特集１／ＳＺＩ両大本山ワークショップ報告

「アメリカの禅」前編

ＳＺＩ会報編集長　**浅 井 宣 亮**（愛知県　地蔵寺）

秋山洞禅師

アンカレッジ禅センターより秋山洞禅先生を講師としてお招きし、６月21・22日にそれぞれ總持寺・永平寺においてSZIワークショップが開催されました。總持寺では、野田後堂老師を導師に迎え国際布教師物故者追悼法要、藤川SZI会長挨拶の後、午後２時30分より、永平寺では本講として黒柳博仁国際部主事の司会の下、松永然道副監院・国際部部長（元SZI会長）、福島伸悦SZI副会長の挨拶の後、午後７時より講演が始まりました。両大本山とも100名ほどの大衆が参加し（總持寺では一般の方も）熱心に耳を傾けているのに驚かされました。

講演内容要旨は以下の通りです。

尚、大本山ワークショップに当たり、大衆にアンケートをお願いしました。次号会報にて結果報告させていただきます。

「アメリカの禅」要旨（前編）

講師　秋山洞禅 師

お疲れのところ恐縮です。

大学でマルクス経済学を学びデモにも熱心に参加し、「宗教は阿片なり」と信じていた私が禅に興味を持ったのは、欧米放浪中が最初でした。武道をやっていたため、宗教としてより精神の鍛錬法として禅を理解し、当時は「禅＝坐禅」と思っていました。

その後、家内と娘が一人ありながら出家、再得度を経て、1979年５月に、松永然道現永平寺副監院老師の後任としてロサンゼルス禅宗寺駐在開教師として赴任し、1985年９月からミルウォーキー禅センター、2001年６月から現在までアンカレッジ禅コミュニティーで国際布教師をし、本年４月末で丁度25年になりました。

禅宗寺は1923年に日系移民によって創立された、日本人、日系人のためのお寺であり、本質的には日本のお寺と同じです。しかしキリスト教の影響もあり、違いも多く見られます。

例えば、本堂はステージ、椅子席といったキリスト教会的。法要後には必ず法話…大変です。サンデースクール。結婚式…最近日本の築地本願寺でウェディングドレスとタキシード姿のカップルが僧侶の前で永遠の愛を誓う「和洋折衷婚」が人気を呼んでいるそうですが、同じスタイル。お盆カーニバル…日本のお祭りのようなもので、寺院運営資金の助けになっている。

禅宗寺の大きな問題は、メンバー数と収入の減少でした。日本人が初めて移民した当時は、言葉や人種差別等のため、一カ所にまとまって日本人街を作りました。しかし、特に戦後、日系人の地位・生活が向上すると生活範囲が拡大し、お寺のメンバーの居住地も拡がり、お寺に来にくくなりました。

また、サンフランシスコの曹洞宗国際センター所長、奥村正博師が言われているように「日本特有の

大本山總持寺の大衆と共に
国際布教師物故者追悼供養を行なう

講演を聴く大本山總持寺大衆

大本山永平寺傘松閣にて講義を聴く大衆

家族制度に基礎を持つ'先祖供養'を基礎とした葬祭儀礼が日本人の文化と社会を離れて存在することは非常に難しい... 祖先崇拝に似た感情や家族を大切に思う... 宗教感情に対応するものは、それぞれの民族文化の伝統の中に既にあるので、これから新しく仏教徒になろうとする人々が仏教に求めているのはそれではないのです。」これは新しく仏教徒になろうという人たちのことですが、日系3世4世等を仏教徒として留めておくことにも通じることです。

アメリカで流行ることは大抵日本でも流行ると言われます。アメリカのお寺も日本のお寺の問題を先取りしています。「日本の布教だけで大変なのに、外国布教なんかに関心は持ってられない」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、「日本の布教が大変なればこそ、アメリカのお寺のことを知る必要がある」と思います。特にこれからの布教を担っていく若い人たちにいえるのではないでしょうか。

次に、私自身が禅宗寺で学んだことについて。私はアメリカへ渡る前「禅＝坐禅」と思っていました。しかし、禅とは坐禅だけではない、禅宗寺でやっているような活動も大切な布教活動だと認識するようになりました。明治、大正時代、英語も殆ど話せず、厳しい人種差別とも闘わなくてはならなかった日系移民の人たちは、お互いに慰め合い、励まし合い、支え合って生きていかなくてはなりませんでした。その中心の一つがお寺であり、お寺は大切な役割を果たし、立派な宗教活動をしていた訳です。

しかし、"慰・励・支え合う"だけでは仏教寺院、禅寺の役割を果たしているとはいえません。禅や仏教の教えをどう伝え、日常生活で実践してもらえるようにするか、これは非常に難しい問題です。

また、禅宗寺では年間20〜30回程の葬儀がありました。葬儀を執り行うことで、今までどこか遠くの話に過ぎなかった"死"ということを痛切に考えるようになり、当時小学生の娘とも真剣に話し合いました。

禅は坐禅だけではないと禅宗寺で学びましたが、坐禅修行が活動の中心となる禅センターへの思いは捨てられず、娘が小学校を卒業するのを機会にミルウォーキー禅センターに移りました。そこでは、妻子ともカルチャーショックを受けてしまいました。二人の曰く「活気のない」町（私曰く'静かで落ち着いた'町）。禅センターが用意した二人の曰く「幽霊屋敷」のようなアパート。日本人が少なく、日本語が通じない（ロサンゼルスの日系社会では日本語だけで生きていける）。寒さ（ロサンゼルスは一年中温暖、ミルウォーキーは9月末から暖房が必要、真冬には−30度になることもある）。収入の少なさ（アパート代の他は月収200ドル）。

最初はアパートに住み、メンバーの家の居間で坐禅をしていました。1年後にはアパートの借用期間が終わるため、アパートと禅堂探しを始め、8万ドル（当時のレートで1500万円程度）の家を買うことにしましたが、ローンを組んでくれる銀行を探すのに一人で苦労し頭金も結局は私の兄姉から借りたため、家内は家の名義を我々にと言いましたが、私の思い通り禅センターの名義にしました。

私には、アメリカ人の弟子が3人おり、現在、1番目の弟子（女）はカリフォルニア、3番目の弟子（男）はシアトルで禅センターを主催しております。2番目の弟子（女）が伝道教師の資格を取ったのを機会に、ミルウォーキーは彼女に譲り、私はアンカレッジ禅コミュニティーに移ることにしました。建物の名義の件が主なる理由で家内とは離婚し、娘も

独立していたので、決断は簡単でした。前年５月末に空港で見た雪山に一目惚れ、その後アラスカを知るにつれ、自然の雄大さ、美しさ、人々の素朴さに、恋心は募るばかりです。

現在、アンカレッジ禅コミュニティーでの修行と共に、アラスカ大学アンカレッジ校の正規クラスとして"坐禅クラス"を担当しています（都合で１年間休講、来年１月に再開）。また、月２回女子刑務所で坐禅指導をし、小～大学、キリスト教会、ユダヤ教会等で時々、仏教や禅の紹介・講義を依頼されます。

アメリカの禅センターのメンバーは、大多数が白人、知識階級・高学歴者が多く、心理学者やセラピスト、先生・教授、詩人・芸術家・音楽家、コンピューター・弁護士・医師といった専門職、主婦等が主なメンバーです。年齢的には、若い人も多少いますが、中年以上が圧倒的、男女はほぼ同数、アンカレッジでは女性の方が断然多いです。

メンバーになる動機としては、１.キリスト教、ユダヤ教の教義、特に神に対する疑問。２.精神的安定・心の平和の希求（心理療法的）。３.知的好奇心（芸術家、心理学、心理療法）等が挙げられると思います。

アメリカには大きな禅センターが幾つかありますが、私が行く所はメンバーが増えません（15～20人）。大きな理由として、三つ考えられます。

第一は、商売下手というより、商売に"関心がない"ということ。大きくなる禅センターは宣伝上手で商売上手（多様な活動やワークショップ、日本文化クラスとの結合等）。私の場合は、宣伝なし、一年中、来る年も来る年も全く同じで変わり映えなし、来る者は拒まず去る者は追わず、というやり方です。

第二の理由は、私が禅センターで話す内容・「我々人間は完全無欠な大自然の働きにより完全な世界に生かされている。しかし頭、思いにより高度の文明を築き上げると同時に、ありとあらゆる問題、悩みを作り上げた。その解決には、頭を切り取り、思いを手放し、只坐る＝無所得、無所悟の坐禅＝只管打坐。しかし人間は日常生活では頭を使わずに生きられない。完全な世界に生かされているという根本的な事実に目覚め感謝すると同時に、どうにも救いようのない自己の現実に目醒め懺悔する。禅はこのどちらかが欠けてもいけない（"完全な世界"とは、戦争や差別のないperfect＝パーフェクト＝欠点のない完璧な世界という意味ではなく、complete＝コンプリート＝完結している世界という意味）。」"無"とか"どうにも救いようのない"という否定的な言葉を使うことは、常に肯定的な生き方をしようとするアメリカ人には受け入れ難いようです。

第三の理由は、アメリカ人は心理療法的、つまり精神的安定や心の平安を求めて、奥村師のいわれる「ストレス解消やリラクゼーションのテクニックとして」坐禅を行う場合が多く、さらに、アンカレッジ禅コミュニティーのメンバーで大学の心理学教授が「アメリカ人は生まれた時から個人主義を教え込まれるため、孤独な人たちだ」と言っていましたが、奥村師も言われるように「アメリカは... 離婚率が50％を超えて、核家族でさえもが核分裂を起こすことが当たり前... 殆どの家庭で、両親ともに職業をもち... 全人格的な接触がなくなり... 人々は、寂しさを感じるのが当然です。その寂しさから逃れるために、サンガあるいは共同体を求める人が多くあります。」しかし、私にとっての禅は救いを求める場ではなく、真理探究・真実の生き方を求める場であり、そのような人たちの要求を満たすものでないようです。

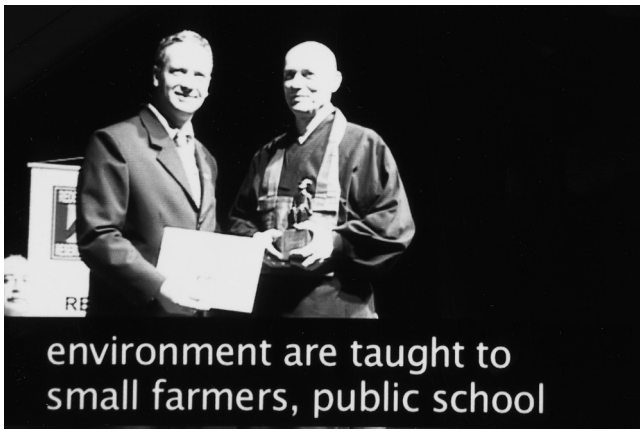
他の問題を箇条書きにしたところ、奈良康明先生編集『道元の21世紀』にスタンフォード大学カール・ビュルフェルト教授が寄稿された、「『参加する仏教』に向けて－アメリカにおける道元禅について」の中でアメリカ仏教の特徴として挙げた５つの傾向と、それに関して、奥村所長が2001年に駒澤大学禅研究所で行った報告中の評と一致するものが殆どで、しかも、両者とも私の拙い言葉など比較にならない程よく整理されているので、恐縮ではありますが、以下その二つに沿って説明させていただきたいと思います。

＊紙面の都合上、後半は次号会報に掲載させていただきます。

特集２／南アメリカ国際布教100周年

ブラジル禅光寺：ユネスコ≪ムリキ賞≫を受賞

ＳＺＩ会員　永明寺住職　加藤孝正

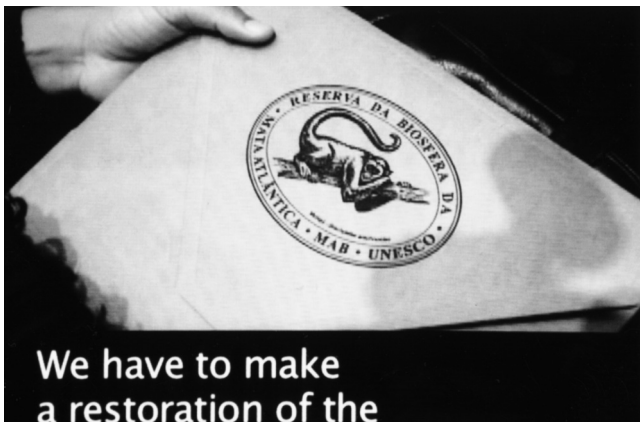


ムリキ賞を授与されるビッチ・大樹師

昨年（2003年）５月イビラスー禅光寺（旧名仏心寺：現地名 Mosteiro Zen,Morro Da Vargem）の主任開教師ビッチ・大樹師とそのグループに2002年度 Premio Muriqui（プレミオムリキ：大猿賞）がユネスコ（国連教育科学文化機関）より授与されました。曹洞宗管長辞令を受けた国際布教師がこのような偉大な賞を受けたことは大変な快挙であり宗門の誇りとすべきでしょう。しかし、『グリーン・プラン』『人権・環境・平和』を掲げ世界的視野にたった現代的宗旨を打出そうとしているはずの宗門なのに、この受賞の意義についてどうもピンとこないようです。地球の裏側の国の出来事だし、ポルトガル語を理解できる人は少ないし、日本のマスコミが取り上げない限りその意義がわからない、というのが残念ながら宗門の現状です。ユネスコが賞賛するに値すると認定したのですから、彼の快挙は宗門の歴史上でも特筆すべきものとして顕彰されるべき、と私は考えます。曹洞宗の国際布教は既に１00年以上になります。先人の撒いた教えの種のいくつかは、異文化の風土の中で揉まれ、日本国内では考えられないような形になって立派に育っているのです。

この賞は、1992年国連主催によりブラジルのリオデジャネイロで開催された地球サミットを記念してユネスコが創設したものです。翌年より、サミットで採択された基本合意『アジェンダ21』にふさわしい１個人・１グループの活動に贈られています。名前の由来は受賞トロフィーの頭にブラジルでも希少 になってしまったムリキ（大猿の一種）が戴っているところからこの名前があります。この通称リオ・サミット（国連環境開発会議）では、世界172ヶ国の政府が参加、その内108ヶ国は元首が出席し（日本の首相は映像参加であった）、地球環境の危機的状況を共通認識として、21世紀に向けた持続可能な開発のための行動計画が採択されました。これは『地球憲章』とも呼ばれるべきものですが、通称アジェンダ21と呼ばれ、環境分野における国際的取り組みの行動計画です。なお同時に、このリオ・サミットでは日本を含む168ヶ国により、『生物の多様性保全と持続可能な利用に関する条約』も締結されています。

この権威あるムリキ賞を受賞した理由の一つは、大樹師とそのグループが作り上げた自然環境保護教育プログラムにあります。このプログラムは1987年に開始されましたが、近隣４市（フンドン、アラクルース、イビラスー、ジョン・ネイバ）の公立学校の生徒達を山に受入れ独自の自然環境保護教育を提供しているものです。現在ではアジェンダ21に則った教育を年間１万６千人の生徒達に提供しており、現在までの受講生徒の総数は延べ20万人以上に達しております。また、子供のみならず成人対象の自然環境保護教育プログラムもあり、これは公務員の団体研修・会社の社員研修・農業団体の研修など各種団体で活用されております。大人・子供を併せると年間３万人に利用される教育活動に育っているのです。



ムリキ賞（プレミオムリキ：大猿賞）

受賞理由の第二は、大西洋沿岸で絶滅寸前にある希少植物の保護・植林活動です。大樹師は6年間の日本での修行後、この地に戻りしばらくの間、自分の生き方を模索し苦闘しておりました。そんなある日、参禅に来た生物学者にMorro Da Vargem（ヴァルジェム山）は希少植物の宝庫であることを指摘されたのです。彼は山に存在する多種多様の希少植物を一本一本が仏様と考え研究しました。そして、草木の種を採ったり挿木にしたりして苗木を育て植林活動を始めたのです。植林は現在も続いておりますが、この活動が評価されたのです。この地は人間活動から離れた人跡未踏に近い山間地であったがため、たまたま固有の希少植物が残っていたのです。それらが植林され増加したため、現在ではこの山は他所では見ることが希な土地固有植物が自然な状態で観察できる場所、いわば自然植物園のような存在になっているのです。なお、大樹師は山の一木一草が広さ約140haの寺領のどこにあり、また原住民のインディオ達は怪我の時にこの樹液を塗るとか、腹痛の時にこの葉を煎じて飲む、などの薬効は勿論、日常生活面での利用法についても熟知しております。

彼はMorro Da Vargemが曹洞宗の修行道場であることを忘れていません。自然環境保護教育プログラムの中に曹洞宗の修行と教えを加味させており、中でも坐禅は必ず体験しなければならないことになっております。他では絶対にまねのできない異色の研修であることから、マスコミで何回も取り上げられ、ブラジル国内外から問合せが絶えません。

以上の受賞対象は、あくまで大樹師の活動の副産物です。彼は自分が曹洞宗から派遣された国際布教師であることに誇りをもち本分を忘れていません。長期参禅者には、年2回3ヶ月ずつの安居を設け特別修行期間を設けております。又、毎月5日間の摂心も行っています。これには毎回50人程度の参加があります。近年はゼンジーニョ（禅の子供）プログラムも軌道に乗り始めました。10才の子供達30人ずつを1グループとし、年に12回、計360人に坐禅を中心とした規律正しい生活を提供しております。いわば、日本で夏休みに行われる「子供禅のつどい」的なものを毎月行っているわけです。彼の行動力には驚かされます。

挨拶をするビッチ・大樹師

また、この禅光寺からは3ヶ所の坐禅グループが派生しております。それらは道場と呼ばれ得度を受けた弟子達によりヴィトリア・ブラジリア・リオデジャネイロで積極的な活動が行われております。

2003年8月、三好晃一南アメリカ国際布教総監が主催した第一回特別摂心はこの地を会場に行われました。この摂心では南米で活躍する坐禅グループの代表者達が一同に会し、基本的な行事進退の確認や情報交換がなされたそうです。伽藍の整った南米唯一の禅センターとして誰もが認める道場になりつつあります。

禅光寺はインターネット・ホームページを持っております。Morro Da Vargemとヤフーの英語版 yahoo.comで探せば出て来ますので興味のある方はどうぞ。

『ローマは一日にしてならず』の格言がありますが、大樹師がここまで来るのに大変な困難と努力があったことを多くの方は知りません。私は愛媛県瑞応寺僧堂安居中に彼と知り合いました。送行後もいろいろな場面で彼から相談を受け、渡伯もし、現地の状況を知る者として日本側の相談相手の一人となってきました。ブラジル帰国後の彼には様々な困難が待ち受けていました。それはカソリック教徒でないことによる迫害的なものであったり、頭を剃った見慣れぬ服装をした一団としての奇異の目であったり、日本では想像出来ないものです。それらはまだ伝統がない国ですから当たり前のこととして甘受できます。でも、昔の修行仲間達からの中傷には相当参ったようです。これを大樹師は達磨大師が中国で迫害を受けたようなもの、また道元禅師が中国から帰朝後日本仏教界から受け入れられなかったようなもの、と受け止めております。しかし、何といっても最大の難関は天候でした。伽藍は死火山の噴火口の中にあります。大雨が降ると伽藍へのアク

セス道路が流されてしまうのです。この土地の雨は一度降ると土砂降りで、その度に道路補修をしなければなりません。約6キロの道ですから並大抵ではありません。こちらの補修が終了したと思ったら、次はあそこときりがないのです。彼の口から何度「もう、山を捨てます！」の言葉を聞いたことか。このアクセス道路は山の生命線であり、しっかりした整備は長年の悲願でした。現在は、いろいろな方々の助力により石畳の立派なアクセス道路ができておりますが、この道路整備には永平寺東京別院安居中の恩師である故丹羽簾芳禅師と瑞応寺安居中の法幢師である故楢崎一光老師の見えない助力があったことをここに記しておきます。この道路整備が禅光寺成功の出発点でした。道路整備が成り、次々といろいろな施設が完成しました。活動が軌道に乗るにつけ、こんどはお金の出所はどこからだとか、何か悪い事でもしているのだろう、と、彼を誹謗・中傷する言動がここかしこより出始めました。残念ですが、宗門内で尊敬されている方々や責任ある地位の方々からも私は聞きました。地球の裏側で情報が得にくいとはいえ、事実関係を確かめずに悪い風評が一方的に流れる宗門の体質は実に危険です。

今振り返って見ると、彼は時代の波にうまく乗る事ができたのです。その時代の波とは自然環境保護という地球的規模の波です。室町時代に禅が大名や武士の精神的支柱となり、時代の波に乗り、曹洞宗寺院が急速に増えたのと同じ理由です。もちろん、彼のまじめな性格、ひたむきな求道心、人を引き付ける魅力、正直さ、交渉力、先見性、幅広い人脈等が根底にあるのですが、それらに輪をかけて国連環境開発会議がブラジルで開催されることになったのが大きな転機でした。この地球サミット開催が決定されてからは、自然環境保護活動に対するブラジル国内での理解が急速に広がりました。国連主催で歴史上初めて世界中の国々の元首が一同に会するかもしれないというサミットですから、人々の注目が集まるのは当然です。国の威信をかけた準備・取り組みが始まりました。ブラジルの地方自治体でも自然環境保護活動に資金提供することが容易になりました。むしろ何かしなければならないとの雰囲気が醸成され、他所ではあまり見かけない彼の活動に地元自治体の目が自然と向いたと言った方がよいかもしれません。これは大会社しかりです。ブラジルでは法律により一定規模以上の利益がある会社はその利益の

三好晃一南アメリカ国際布教総監とともに

一定割合をNGO（非政府組織活動）に寄付することが義務付けられているそうです。従来、この資金はカソリックの神父達が仕切っており、カソリック関連のNGOが享受していたそうですが、大樹師はそこに風穴をあけ、初めて仏教徒の活動に資金を拠出させることに成功したのです。自然環境保護活動はリオ・サミットを控えたブラジル国民にとっては国家的な命題になり、彼の活動の追い風として大きく働いたのです。

今回、ユネスコより権威あるムリキ賞を受賞したことにより、彼の活動は益々勢い付いております。この受賞は、彼とそのグループ以外にも、活動資金を提供して来た地元自治体や大会社にとっても名誉なことであるからです。

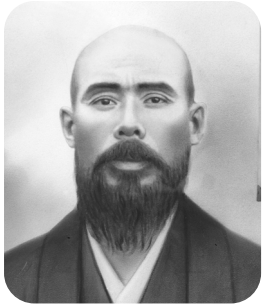
今年は禅光寺創立30周年に当たります。禅光寺のあるエスピリット・サント州では州議会が記念式典を8月27日に開き祝ってくれることになっております。また、禅光寺参道入口の土地4haが寄贈され、現在ここに日本庭園が造成されております。この日本庭園は丹羽禅師記念公園と命名されることになっております。公園内には広さ600㎡のセミナーハウスが建てられます。このセミナーハウスの名は楢崎一光記念セミナーハウスと名付けられる予定です。いずれも彼が膝下で修行した恩人の名前です。ブラジルに行く機会がありましたら、ぜひ一度禅光寺を訪ねて下さい。そこには、日本では見られない曹洞宗が展開されております。

最後に、7年前、詩人でもある時の州知事から私が直接聞いた言葉を紹介いたします。『エスピリット・サント州には世界に誇れるものが二つある。一つは海の青さであり、他の一つは禅光寺である。』

南アメリカ国際布教100周年

ペルーにおける曹洞宗　～開教100年の軌跡～

太 田 宏 人



上野泰庵師

開教の動機と日系人の認識

1903（明治36）年、曹洞宗の上野泰庵師（うえの・たいあん）により、仏教が南米の地に初めてもたらされた。

2003年は開教100周年の佳節。そこで本稿では、ペルーにおける曹洞宗僧侶の足跡を追いながら、南米最古の仏教寺院・泰平山慈恩寺の略歴を紹介する。

南米開教の動機は、ハワイや北米と同様、日本人移民への布教活動であった。日本人による南米への集団移民の嚆矢はペルー（秘露）で、1899（明治32）年に790人の第１回移民（第１航海）が同国へ上陸した。彼らは、「耕地」と呼ばれた大規模プランテーションと４年契約を結び、砂糖黍や綿花栽培、製糖作業に従事した。しかし、不慣れな重労働と劣悪な住環境および伝染病により、錦衣帰郷を夢見た多くの若者が絶命した。伊藤一男という読売新聞の記者（故人）は"第１航海では契約満了までに79％が死亡。戦闘部隊ならほぼ全滅"と記す（『アンデスへの架け橋』日本人ペルー移住80周年祝典委員会、1982）。

非業の死を遂げた者への同情は「耳なし芳一」に語られた壇ノ浦の平家一門を例にとるまでもなく、大衆の心に訴える。「悲惨な初期移民」の存在が、1907（明治40）年創建（両大本山からの山号寺号下附は翌年）の慈恩寺の存在理由と考えられたのも無理はない。

ペルーに派遣された今村（野田）良治外務書記生の報告では、初年度の死亡は98人である。しかも、移民たちが労働や環境へ順応した次年度からは、死者数が急減している（『日本外交文書』第36巻）。790人のうちの98人は少なくはないが、「79％」は誤謬が過ぎる。伊藤の思い込みもあるだろうが、"初期移民はかなり死んだ"というコンセンサスがすでに日系人間に確立されており、彼はそれに影響されたのだ。

ところが、ペルーに渡った上野師らの熱意は、死者供養ではなかった。それは当時、各宗が国内外で展開していた布教・伝道活動と同じ軌道上のものだった。曹洞宗務局（現曹洞宗宗務庁）の『宗報』（現『曹洞宗報』）に掲載された一連の記事が、国際布教師の渡航理由を明確に示している。それによると、国際布教において他宗に遅れをとっていた曹洞宗の「挽回」のため、ペルー開教が準備されていたという（注１）。

明治31年（ペルーへの移民開始前）発行の『宗報』第30号には「南米秘露國の宗教」と題し、「異教徒の日本人移民がペルーで宗教的軋轢を受けるか否か？」という記事が掲載される。明治35年の第142号の「海外布教」という論説を引用すると、

「今や我が同胞の人民にして。西欧。東米。南濠。北露に散在する者は。幾千萬を以て數ふるほどなりき。宗教信者と。無宗教者とに拘はらず。凡そ人として心あらん者は。皆な宗教心あるべき筈の者なり。之れを指導するは司教者の天職なり」とある。

上野師のペルー渡航直後の第157号にも「海外宣教の時機」と題する論説が掲載され、「移民を教導する」上野師を激励する。これらの記事に、国際布教の契機としての「悲惨な先亡移民」は登場しない。

布教のモチベーションと、後世の日系人が考える「慈恩寺の必要性」「僧侶の派遣理由」はズレていた。この差異が、慈恩寺の歴史叙述を変容させ、日系人と同寺を断絶させる原因になっていく。

ちなみに、上野師と同年にハワイへ渡った曹洞宗のハワイ開山・河原仙英師は、同郷の広島出身移民へのケアを希求した「漫遊視察的の者」（同第153号、同36年）で、「慰問使」（同159号、同36年）であり、「決して宗門中央からの組織による派遣ではな」かった（『曹洞宗ハワイ開教七十五年史』、ハワイ開教総監部、1978）。当時の宗門または『宗報』における、ペルー開教との立場・扱いの差は歴然だ。ちなみに、上野師と同郷の兵庫出身のペルー移民は皆無だった。

開教100年の第一歩

管長辞令（注２）を受けた上野師は、1903（明治36）年６月20日、第２回の移民集団1178人とともに英国船「デューク・オヴ・ファイフ」号で神戸を出航した。ペ

寺世話人たち。後方は慈恩寺（サンタ・バルバラ時代）

ルーのカヤオ港到着は同７月29日。南米開教の第一歩である。渡航時点の年齢は数えで32だった。

上野師は北部のランバィエケ県トゥマン耕地に移民監督として随行した。当時の教団は生活費その他の諸費を与えなかったため、生きるためのアルバイトだった。上野師は曹洞宗大学（現駒澤大学）卒のインテリで、風紀やメンタル面を担当した。

上野師が赴任したトゥマン耕地は問題移民が多かったが、師は女子労働者の風紀向上に貢献した（『日本外交文書』第36巻）。しかし、集団脱走や移民間の殺傷事件が絶えず、見かねた耕地側は明治38年６月に134人の日本人を全員解雇。移民らはただちにカニエテ郡の諸耕地に吸収され、師は製糖工場のあったサンタ・バルバラ耕地に入った。そして喜捨を集め、同地に伽藍を建てる（同40年）。土地は借地である。

「僧上野泰庵氏（略）ノ熱心ト本耕地移民ノ寄附千數百圓トニヨリテ建立セラレタル一寺院アリ（略）壯麗ナルモノニアラザルモ兎モ角南米ニ於テ建立セラレタルモノノ嚆矢ニシテ且現今ニテハ南米唯一ノ佛寺トシ毎日曜日ニ説教アル外移民ノ葬式、死亡者ノ法要等ヲ行フ」（野田良治「秘露國本邦移民勞働地視察報告書」、明治41年）。

寺に隣接して南米最古といわれる日本人小学校も建てられ、上野師が教鞭をとった。

はじめ寺は「仏徳山（一説に太平山）南漸寺」と称したが、明治41年４月15日付で曹洞宗両貫首より正式に「泰平山慈恩寺」と名付けられ、２度の移転を経て現在にいたる。なお、慈恩寺では創建当初から他宗派の檀家の人々が世話役となっていた。

師は、移民会社はおろか宗門の援助さえ仰がず、『宗報』にも記事を送らなかった。1917（大正６）年８月、慈恩寺と布教継続を後任の齋藤仙峰師（さいとう・せんぽう）に託し、14年ぶりで故郷・兵庫に帰着する。上野師は、46歳になっていた。

慈恩寺と後続の布教師たち

山形県出身の齋藤仙峰師は1917（大正６）年２月、ペルーに上陸したが、大正８年４月５日、感冒によって急逝。31歳だった。南米開教初の殉職者である。

後任は、兵庫県の圓通寺で安居していた広島県出身の押尾道雄師。彼は、上野師の「兵庫グループ」の一員だった（注３）。

押尾師の着任は大正８年。辞令は２月に出ているが、齋藤師の遷化以降にペルーに上陸した。

押尾師の着任前後から、日本人移民は耕地を離れ、都市へ移住していった。

大正14年、地主から立ち退きを命じられた慈恩寺は同郡内サン・ルイス町に土地を購入し、転居した。

教線拡大に尽瘁し、昭和２年に帰国した押尾師の後任は秋田県出身で愛知で育った佐藤（旧姓渡辺）賢隆師（さとう・けんりゅう）。着任直後の昭和２年、師は首府リマ市に布教所「慈光會」を開く。一時はいくつかの日本人自治村を擁したカニエテ郡だったが、当時残っていた日系人は100家族を切っていたという。

集会や法要など、慈光會の活動は盛んだった。リマ在住の佐藤師は各地方へも精力的に巡錫したが、カニエテ郡の慈恩寺を本拠とする姿勢は崩さず、同郡の移民にも敬慕された。だからこそ、師の要請に多くの邦人が応え、彼らの浄財によって同郡カサ・ブランカ耕地のはずれに、日本人無縁塔（無縁仏の慰霊納骨堂）が完成するのである（同７年）。無縁塔がそびえるカサ・ブランカ日本人墓地は、それ以降つねに慈恩寺とワン・セットで「移民の聖地」として扱われるようになる。

同10年、佐藤師は41歳で病死する。後任は鳥取県出身の中尾證道師（なかお・しょうどう）で、同年の赴任。師は翌年乃至12年に、リマに「南米山中央寺」を

カサ・ブランカ日本人慰霊塔の竣工式（昭和7年）

現在の慈恩寺（カニエテ郡サン・ヴィセンテ町）に保管される位牌

開き、曹洞宗務院（当時）より同寺主任に任命される。宗門公認の山号寺号は、まるで曹洞宗の"南米開教総監部"である。しかし、ペルーの移民に宗派のこだわりはなかった。そして、ペルー社会との深い関係を築き始めた日系人に対する"より良く生きるため"の布教・教化活動は、すでにカトリック教会にその座を奪われつつあった。仏教への期待は、教義や教化とは無縁の「死者への儀礼」だけで、布教師よりも読経師が求められた。ペルー版の「葬式仏教」だ。

しかし、日本から派遣された国際布教師・中尾證道は"布教"に固執し、孤立した。布教は失敗だった。昭和16年に夫人が病没するさい、師は薬代が払えない状態だった。残された３人の幼い子どもたちを日本の親類に預けるため、大戦前夜の同16年、彼は一時帰国した。渡航費用は、移民たちのカンパで集められた。

太平洋戦争の端緒が開かれると、ペルーも対日宣戦。中尾師はあくまでペルーに戻るつもりだったが、便船はなかった。

戦後の昭和30年、曹洞宗は挙宗態勢でブラジル布教を開始する。当時の『曹洞宗報』にはこれをもって"南米開教の第一歩"とする表現が目立つ。遡ること半世紀、ペルーに刻まれた５人の布教師の軌跡と、彼らを支えた日系人の存在は、封印されてしまった。

そしてペルーの日系社会は、読経業者時代を迎える。お経が読めれば、誰でも僧になれた。

戦争中に慈恩寺は荒廃し、無縁塔も倒壊した。そこで在留邦人たちは、読経師第１号として戦前から活躍していた新開治作師（しんかい・ちさく）に昭和26年、慈恩寺第５世就任を要請する。中尾師は、慈恩寺第５世とはカウントされなかった。

新開師は、真宗の教理を学んだが、僧籍はなかった。山口県出身の移民だった。新開師は過去帖や寺に保管される書類の整理、無縁塔の再建、各地の日本人慰霊塔の建設などに奔走するが、昭和28年に急逝する。

以降、やはり移民で読経師でもあった清広亮光師（きよひろ・りょうこう）が、法要などのさいは慈恩寺に赴いた。

1961（昭和36）年11月、管長の辞令で清広師が慈恩寺復興主任となった（正式には「住職」ではない）。清広師はペルー移住前は、曹洞宗の僧籍を持っていた（立身未了）。70年代になって、福島市・圓通寺の吉岡棟一住職が清広師を弟子に迎え、再得度をさせた。その際の法名は亮徹である。吉岡師は、物心両面にわたって清広師および慈恩寺を支えた。

清広師によって、慈恩寺は「復興」する。1977（昭和52）年、日系人多数の寄付をはじめ、吉岡師や曹洞宗宗務庁、ペルーの邦系企業からの金銭的援助を受け、同郡サン・ヴィセンテ・デ・カニエテ町の現在地への移転・新築も果たした。だが、つねに「悲惨な移民先没者」が強調され、彼らを集団で祀る特殊な慰霊施設として慈恩寺は特化していった。いつしか清広師の手で寺の由緒も変質し、「死者のために創建された納骨堂」と表現されるまでなった。清広師の恣意的な改変というよりも、日系人の意識の反映だろう。

misioneros（派遣布教師）の「その後」

南米開教および新寺建立という大事業を成した上野泰庵師。しかし、その任期中に日本の仏教教団の国際布教は国策に迎合し、布教のおもな舞台はアジアへ。ペルー慈恩寺への関心は、永らく同宗内部では霧消していた。上野師が『宗報』に掲載した広告（帰国挨拶）には凱旋というような晴れやかな気分が滲む。ところが、周囲、とくに宗政中央からの反応、後続布教師への目に見える支持はなかった。

清広師による日系人宅での慰霊供養（1957年）

帰国後、上野師は兵庫の第二曹洞宗務所長などを歴任するが、中央へは出なかった。上野師は、郷里の人々に尽くし、愛された。自坊では託児所を開き、子どもたちを温かく育てた。

1950（昭和25）年２月11日、隠居していた建物の火災によって示寂。79歳だった。生涯独身で筆不精。最期までペルー時代のことを一切記録に残さなかった。

一方、日本に生還した押尾道雄師は朝鮮半島で布教に従事し、終戦によって引き揚げているが、帰国後数年で遷化している。中尾證道師は、南洋テニアン詰布教師を拝命するが、テニアンで働いた形跡はなく、長男とともに行方不明になっている。乗船が、航海中に敵艦によって沈められた可能性もある。残る二人の子どもは孤児になった。

なお、清広亮光師が去世した平成４年以降、慈恩寺は無住である。清広師やペルー日系人協会からの宗門への後任派遣要請は一顧だにされなかった。清広師は憤慨した。

そして平成７年ごろから、他宗の僧侶がペルー日系人協会の「認可」のもと、慈恩寺を専有するようになった。この問題は、2000年の大竹明彦宗務総長（当時）らの訪問によって一応の解決を見たが、他宗派僧侶はペルーに常駐しているものの、曹洞宗僧侶はあまり訪問していないのが実情である。

日系人は昔から、宗派にはこだわっていない。「祖父母の供養は、祖父母の信仰でおこないたい」というのが、彼らの仏教に対する率直な要請である。

だが、今でも多くの家庭には仏壇が安置され、日系人自身の手によって供養が続けられている。かつては、カトリック教会内での葬儀にさえ位牌が持ち込まれ、教会内で清広師が読経をしていた。日系人は完全にカトリック化しているが、仏壇や墓前において、ペルー人には見られないような、一種独特な「祖父母（祖霊）たちとの交流」を続けている。

これらのゆるぎない宗教的基盤を作ったのは、上野師に続く歴代のMisioneros（派遣布教師）たちにほかならない。

現在、チベット仏教やAZI（弟子丸泰仙　国際禅協会、フランス）の影響下にある坐禅グループも存在している。メンバーに日系人は少ない。ペルーを管轄する曹洞宗の南アメリカ国際布教総監部では近年、上記禅グループとの関係を密にし、慈恩寺や仏教的習慣を護持してきた日系人との主体的な関わりを薄くしている。禅グループへのケア自体は否定されるものではないが、一方では、日系人の葬儀式および年忌法要ではまだまだ読経師が求められている。最後の読経師である徳田義太郎師は高齢で、後任を曹洞宗側に幾度も求めているのだが、これもなぜが実現していない。

リマの禅グループを対象に
昨年行われた坐禅会

本年８月、ペルーで南アメリカ開教100周年の記念行事が曹洞宗主催でおこなわれるという。世界遺産観光とセットになった宗門一般僧侶によるツアーも組まれるそうであるが、ペルーにおける曹洞宗の１世紀にわたる布教、日系人とのかかわり、日系人に与えた感化といったさまざまな足跡を再発見する機会になることを心より願うばかりである。

（注１）『宗報』第142号（明治35年）論説「海外布教」。
（注２）明治36年５月16日付「南米秘露国本邦移住民布教及宗教學研究ノ為メ渡航ヲ命ズ」（『宗報』156号、明治36年６月）
（注３）ペルー駐在布教師の法脈に関しては、『曹洞宗報』平成15年８月～10月の「国際インフォメーション」連載の拙稿に詳述。

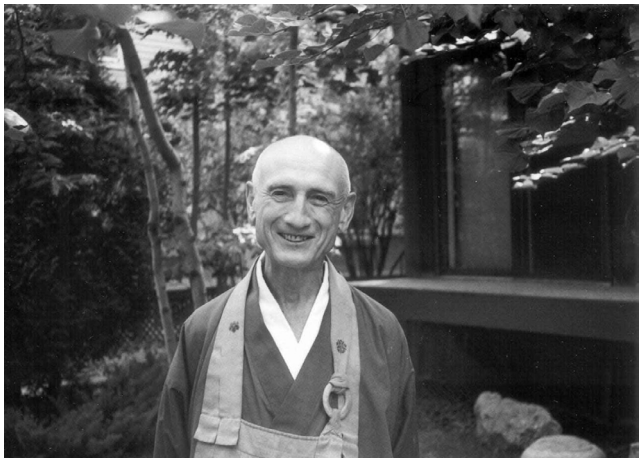
おおた・ひろひと／ペルーの日本語新聞『ペルー新報』元編集長。1997年から2000年にかけて慈恩寺に保管される2000人超分の位牌を調査し、スペイン語による過去帖を作った。

※南アメリカ開教100周年記念ツアーについては、宗務庁国際課にお問い合わせください。

アメリカの仏教書

第7回／禅仏教篇⑦
『禅の三本柱』(フィリップ・カプロー 著)

マサチューセッツ州　ヴァレー禅堂　堂頭　**藤 田 一 照**



フィリップ・カプロー老師

2004年5月6日、アメリカの禅の歴史を語る上でどうしても欠かせない重要人物の一人が世を去りました。その人の名はフィリップ・カプロー（Philip Kapleau)。ニューヨーク州ロチェスターにあるロチェスター禅センターの創設者であり、The Three Pillars of Zen(『禅の三本柱』), Zen: Merging of East and West（『禅－東洋と西洋の融合』), The Wheel of Life and Death：A practical and Spiritual Guide（『生と死の車輪－実践的・精神的手引き』）など禅仏教の好著を著した人でもありました。1987年に75歳で禅センターの指導から身を引いて隠退し、最近はパーキンソン氏病を患っていることを耳にしていました。その最期はたいへん安らかだったようです。友人からの電子メールによれば、陽光あふれる禅センターの庭で弟子や家族、友人に囲まれながら静かに息をひきとったそうです。享年91歳でした。今回は師の冥福を祈りつつ、代表的著作である『禅の三本柱』を紹介することにします。

フィリップ・カプロー師は1921年にコネチカット州ニューヘイヴンに生まれ、法律を学んで法廷での裁判の様子を記録するコートレポーター（court reporter）になりました。第二次世界大戦後はニュールンベルグ裁判や東京裁判といった戦争犯罪人を審判する軍事法廷の記録をとるという重要な仕事をしました。法廷で明らかにされる戦争の残虐さをつぶさに聞きそれを記録するという経験は彼の心を深いところから揺り動かし、人生の根本問題を問う宗教的探求へと向うように強く促すことになりました。そして、幼い頃から無神論的な立場をとっていた彼は仏教、とりわけ禅に強い関心を持つようになります。

1950年、日本からアメリカに戻った彼はコロンビア大学で鈴木大拙の禅思想の講義を聴講します（この講義にはエーリッヒ・フロムやジョン・ケージなどの知識人たちが顔を見せ、彼らに大きな影響を与えたと言われています)。しかし、彼の場合はそうした学問的・知的な理解では満足することができず、1953年、専門僧堂で禅を体験的に学ぶため、一切の仕事を投げ打って再び日本へもどってきます。このとき彼は41歳、ほんの数語の日本語を話せる程度でした。何人かの禅匠にすげなく拒絶されたあと、龍沢寺の中川宋淵老師に受け入れられ、そこで3ヶ月修行した後、師の勧めで原田祖岳老師のいる発心寺に移ります。3年そこに留まりますがもともと身体の丈夫でない彼は健康を害してそこを出なければならなくなります。中川老師は今度は原田老師の弟子である安谷白雲老師の下で修行するように勧めます。安谷老師から与えられた無字の公案に懸命に取り組むこと3年、1958年安谷老師とのある接心中ついに「見性」を体験します（そこにいたるまでの経過は『禅の三本柱』第五章にあげられている「悟り体験の実例」に詳しく書かれています)。その後も安谷老師について修行を深め、1961年には得度を受けます。日本での都合12年にわたる修行ののち安谷老師から禅を教えてもよいという許可をもらい、1965年にアメリカに帰ります。

カプロー師は安谷老師のもとで修行しているあいだ、かつてコートリポーターだった時の技能をフルに生かして、安谷老師の提唱を筆録し、僧侶や在家修行者に綿密な聴き取りをおこない、彼が実際に見聞した禅修行の細部についてくわしく書きとめました。さらに師家と修行者の間で行われる本来は非公開の個人的教示（「独参」に立会い、それを記録する

という許可も特別に与えられました（彼はおそらくそういうことをした最初の西洋人だったでしょう）。そうした貴重な経験を材料として生み出されたのが『禅の三本柱』と題された一書でした。出版されたのは師がアメリカに帰ってまもなくの1966年のことです。日本において正式な師について本格的な禅の修行を行った最初の西洋人によって書かれた、禅の「思想」ではなく禅の「修行」を具体的に詳しく説く本としては最初の英語本でした。400ページもあるぶ厚い書物ですが、著者の筆力もあってたちまちのうちに英語で書かれた「禅の古典」としての地位を得ました。現在も定評のある禅の入門書として版を重ね広く読まれています（わたしの読んだものは『二十五周年記念版』です）。これまでに12ヶ国語に翻訳されているそうです。大学の仏教入門コースにおいても、鈴木俊隆老師のZen Mind Beginner's Mind（『禅心　初心』）とともに禅関係の必読書としてしばしばとりあげられています。わたしは、この本を読んで禅修行を志したという人に何人も会っています。カプロー師が1966年にロチェスター禅センターを創設する際、多額の経済的援助をしたドリス・カールソン女史（ゼロックス創業者夫人）やリトリートセンター（禅堂）を開くために16万坪にあまる広大な土地を寄進した実業家ラルフ・シェイピン氏などはこの本の最初期の読者でした。

『禅の三本柱』の「三本柱」とは「教義」、「修行」、「悟り」のことで、構成は次のようになっています。

第一部　教義と修行

第一章　安谷老師による禅修行に関する入門的講義の記録

第二章　無字の公案についての安谷老師の提唱の記録

第三章　安谷老師と十人の西洋人との個人的教示の記録

第四章　「一心（One-Mind）」についての抜隊(ばっすい)禅師の法話と弟子への手紙の翻訳

第二部　悟り

第五章　現代の日本人および西洋人の悟り経験の実例八例

第六章　岩崎やえこ女史から原田老師にあてた彼女の悟り体験についての手紙とそれに対する老師のコメント

ロチェスター禅センター

第三部　補遺

第七章　道元の『有時』の翻訳

第八章　『十牛図』の翻訳

第九章　坐禅の姿勢について

第十章　禅の語彙と仏教の基本的用語の意味

禅修行についての多方面にわたるテーマを扱ったこれだけ大部の本を限られた紙面で要約することはわたしの力量を超えていますので、ほんの何箇所かを訳出してそれに代えることにします。

「•••坐禅のねらいは三つある。それは１.集中力（定力）の養成、２.悟り（見性悟道）３.日常生活における無上道の実現（無上道の体現）である。」

「•••この個人的指導（独参　修行に関するあらゆる問題を老師に提示すし教えを受ける非公開の面談）がないなら、その坐禅修行が真正なものであるとはいえない。残念ながら明治以降、曹洞宗においてこの伝統はすっかりすたれてしまい、わずかに臨済宗に残っているだけだ。坐禅を、最初は速いが、あとでペースが落ちる者がいるかと思えば、最初はのろいが後でペースが上がる者もいる、それぞれが異なった荷物（つまり臆見）をしょって歩いている『旅』のようなものだと考えるなら、独参が不可欠なものであることがわかるだろう。」

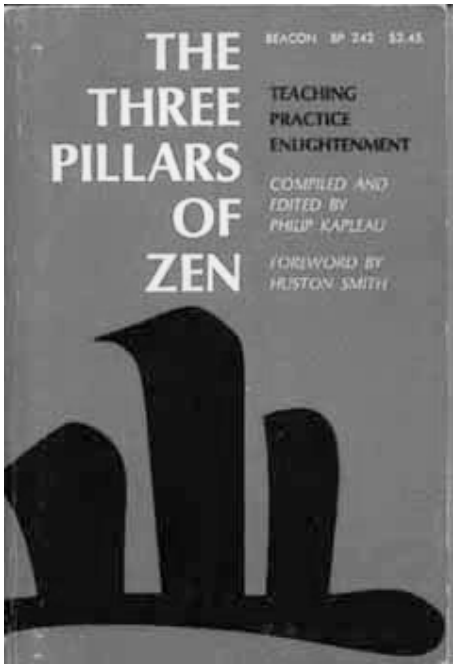
「•••見性するとは、『一』の世界、平等の世界を徹見することだ。この体験は浅いこともあれば深いこともある。だいたいにおいて最初の見性は浅いものだ。いずれにせよ、見性しただけでは、人々がわかっていると思い込んでいる『多』の世界についての真の理解にはまだ及んでいない。•••最初『一』の

世界についての知覚はそれほど明瞭ではない。依然として『自分の向こうに何かべつなものが有る』と感じている。特に自分が嫌いだと感じるものに対しては、他者も実は自己であるという感覚は非常にもちにくい。しかし修行が深まるにつれてこの自他を隔てる障壁はしだいに解けていく。」

弟子Aと名づけられた六十歳の西洋人女性の独参の例「弟子A：一時間ほどまえ坐禅中に突然足の痛みが消え去り、気がついたら涙が出て止まらなくなっていました。何かがわたしの内部で解け去ったように感じました。これはどういうことなのでしょうか？老師：誠心誠意を捧げ尽くして行じられる坐禅はすべての人やものとのへだたりの感覚を拭い去ってくれる。通常、われわれの思考は二元的だ。つまり、自分と、自分ではないものという具合に分けてものごとを考えている。これが愛着や嫌悪を引き起こし、苦しみを作り出し、人生をみじめなものにしているのだ。坐禅によってこの二元性が次第に消えていく。感情や思考がもはや、実際には存在していない「我」にとらわれなくなるから。慈悲のこころが自然に深まり広がっていくのだ。今あなたに起きているのはそれなのだよ。それは大変喜ばしいことだ。だが、さらにもっと先へと進んでいかなければならない。もっともっと真剣に取り組んでいきなさい。」

Mr. P. K. （アメリカ人、元ビジネスマン、46歳）と名づけられた人物（おそらくカプロー師自身）の見性の経験「1958年８月４日：･･･老師いわく、さあ、おまえは今おまえと悟りを隔てている最期のそしてもっとも手ごわい壁の前に立っている。古人が言ったように鉄牛の血を吸おうとしている蚊のような感じがするかもしれん。しかし、耐えて耐えて耐えぬかねばならん。決して『無』を手放してはならん。寝ている時に『無』を失いそうなら徹夜で坐禅しなさい。そこでわたしは夜中の一時まで寺の庭で『無』と取り組んだ。脚の凝りや痛みを和らげるために体操をしようと立ち上がり、そばの柵にもたれた。その瞬間突然悟った。その柵とわたしがひとつの形のない『木-肉の無』であることを！当然だ！･･･この洞察に力を得て四時まで坐り続けた。1958年８月５日･･･自分を『無』の中に投げ込んでそのなかに没入した。そして自分は完全に消え去った。わたしが朝食を食べているのではない。『無』が食べているのだ。掃除をしているのはわたしではない。『無』がしているのだ。･･･午後の独参、老師は鷹のような眼でわたしを見た。そしてこう語り始めた。宇宙は一である･･･。老師の語る一語一語が銃弾のようにわたしのこころに突き刺さってくる。突然、老師、部屋、あらゆるものが　目もくらむような光の流れの中に消えうせてしまった。そして甘美でたとえようもないほどの喜びに自分が浸されているのを感じた。永遠のなかにわたしだけがいる。わたしだけが存在している！･･･そして老師の姿が眼に映ってきた。わたしの視線と老師の視線が出会い、二人は笑い出した。」

第九章には坐相についての解説がイラスト入りでくわしく書かれていることを特記しておきます。とかく坐ること自体に困難さを感じやすい西洋人には大変役立つアドバイス（痛み・しびれ・眠気への対処法など）が質疑応答の形で載せられています。本書に正直に書かれているようにカプロー師自身がそういう困難さにぶつかり、苦労してそれを克服した経験が背景にあるのです。禅修行の具体的指南書たらんとする本書のねらいがそこによく表れていると思います。



The Three Pillars of Zen（「禅の三本柱」）

寄付者・会費納入者名簿 2004年5月1日～2004年7月1日まで

◆ＳＺＩ会費納入者

新規会員並びに会員ご継続ありがとうございました。
（敬称略・順不同）

棟方清允	秋田県	大川寺
慈眼寺	岩手県	
佐藤陸雄	岩手県	長安寺
伊藤禅龍	北海道	法徳寺
川村寿光	紋別郡	明光寺
近畿日本ツーリスト	東京都	
正洞院	台東区	
黒木　靖	江戸川区	
善徳寺	江東区	
黒田純夫	品川区	桐ヶ谷寺
角田泰隆	世田谷区	
浦敏之	世田谷区	駒沢大学高等学校
笹川悦導	新宿区	観音庵
西沢宏道	新宿区	宗参寺
赤松利章	中野区	宝泉寺
飯島尚之	中野区	宗清寺
田中芳周	杉並区	観泉寺
佐藤昭次郎	新宿区	
来馬宗憲	豊島区	清巌寺
籏本宏昌	豊島区	泰宗寺
安達良元	豊島区	全昌院
松田千春	板橋区	
仲井章史	板橋区	増福寺
岡本信之	八王子市	大恩寺
一適隆章	清瀬市	長源寺
村上義教	多摩市	観蔵院
長円寺	武蔵村山市	
大善寺	横須賀市	
正観寺	横浜市	
岩本英男	横浜市	
慶林寺	神奈川県	
尖秀雄	神奈川県	吉祥院
宗胤寺	千葉県	
高木乗正	成田市	永興寺
河原無行	茨城県	養徳寺
皆川広義	栃木県	常真寺
小泉悟道	埼玉県	円通寺
石井早苗	埼玉県	正覚寺
岸世一	埼玉県	東竹院
大森篤史	埼玉県	東栄寺
高橋秀雄	埼玉県	広徳寺
岡部雅明	大里郡	普済寺
村上泰賢	群馬県	東善寺
竜華院	沼田市	
山口淳一	群馬県	㈲オモロ
黒柳博仁	長野県	天周院
永源寺	静岡県	
成安寺	静岡県	
大興寺	静岡県	
鈴木包一	静岡県	林叟院
信香院	静岡県	
鶴田悦章	額田郡	本光寺
龍潭寺	名古屋市	
押田清道	名古屋市	
神龍寺	愛知県	
江川辰三	瀬戸市	宝泉寺
原田道一	岐阜県	正宗寺
慈恩寺	大阪府	
薮下敏也	京都市	松本屋
細川皓代	京都市	宗仙寺
天徳寺	鳥取県	
小島宗光	佐賀県	本光寺
宮崎輝郎	北高来郡	和銅寺
中村覚道	北松浦郡	洞禅寺
村上和光	熊本県	芳證寺
板橋興宗	福井県	御誕生寺
徳城寺	富山県	
田宮黎友	新潟県	興源寺
吉岡棟憲	福島県	円通寺
長谷川崇信	西白河郡	常在院
雲月寺	福島県	
玄光庵	仙台市	
秀林寺	仙台市	
我妻耕道	仙台市	江巌寺
天野宏雄	加美郡	皆伝寺
吉田俊英	宮城県	洞林寺
天雄寺	宮城県	
蓮池泰乗	鶴岡市	宗伝寺
禅源寺	鶴岡市	
落合道正	鶴岡市	田種院
難波真一	鶴岡市	
大法良典	山形県	盤昌寺
渡辺禅悦	山形県	清林寺
池田好雄	山形県	見竜寺
斉藤勇雄	山形県	永鷲寺
宮崎拡行	山形県	延命寺
善宝寺	鶴岡市	
岡野定丸	福島市	盛林寺
富尾智恵	愛知県	松月寺

◆ＳＺＩ特別寄付者

ご寄付ありがとうございました。
（敬称略・順不同）

観泉寺	杉並区	
正洞院	台東区	
Ｊ．Ｏ	福島県	（匿名希望）
村上虎雄	群馬県	最興寺
武田秀嗣	富士見市	興禅寺
尖　秀雄	神奈川県	吉祥院

ＳＺＩ動静報告

2004年5月1日
　～2004年7月1日まで

5月17日	会報編集会議　芝・光明寺
6月2日	会報発送作務
6月21日	SZIワークショップ　大本山總持寺 講師　　米国　秋山洞禅師 秋山洞禅師との来日歓迎夕食会
6月22日	本講　大本山永平寺 講師　　米国　秋山洞禅師

※会報編集会議・事務局会は常時インターネットにて行っております。

第6回 ゆめ観音 in 大船開催のお知らせ

～ つながる ひろがる アジアのねがい ～

YUME KANNON, Asia Festival

2004 年 **9** 月 **4** 日（土）**12:00-20:30**
入場料 **300** 円（アジア支援各団体の寄付として）

特別出演　中国琵琶奏者　シャオロン

上海市出身 国立北京中央音楽院卒業
人間国宝級の大家である劉徳海教授に師事。東京を拠点にアジアおよび欧米各地でコンサートや国際音楽祭での演奏など世界的に活躍する中国琵琶の若手女流奏者。 中国琵琶独特の輪指（りんし）と呼ばれる奏法を駆使したシャオ・ロンの繊細かつドラマチックな表現力と 緩急自在で華麗な演奏は世界中の人々を魅了している。

特別法要　万燈供養

会場にお越しのみなさま、アジアゆかりの方々、また、本年は特にペルーの方々の物故者供養を行います。

■その他、舞台、会場展示で多数のエントリーをいただいております。皆様のお越しをお待ちしております。
■詳細は http://soto-zen.net/yume　をご参照ください。

主催／ゆめ観音実行委員会（大船観音寺・SOTO 禅インターナショナル）
後援／鎌倉市役所・神奈川新聞社
問合せ ／大船観音寺 0467-43-1561（松山）・SOTO 禅ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙ kameno@teishoin.net（亀野）